

【草花の部屋】

トウモロコシ（イネ科トウモロコシ属 *Zea mays*）

和名：トウモロコシ（玉蜀黍） **別名**： **英名**：maize

イネ目 一年草 **原産地**：中南米

花言葉：富、財宝、豊富、同意、けんか、 **花色**：



← 写真-1 トウモロコシ

撮影日：2019年06月09日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん

▽ 写真-2 トウモロコシの雄花

撮影日：2019年06月09日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん



← 写真-3 トウモロコシの雄花

撮影日：2019年06月09日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：M さん





← 写真-4 トウモロコシの雄花

撮影日：2019年06月09日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：Mさん

▼ 写真-5 トウモロコシの雌花と包葉

撮影日：2019年06月28日

撮影場所：大和郡山市郊外にて

撮影者：Mさん



大和郡山市郊外の家庭菜園で見かけました。特別、珍しい植物ではありませんが・・。

トウモロコシは、キュウリやツルレイシ(ゴーヤ)などと同じ「雌雄異花植物」で、雄花と雌花がひとつの株で別々につきます。発芽から3ヶ月程度で雄花(雄小穂)と雌花(雌小穂)が別々に生じます。雄小穂は茎の先端から葉より高く伸び出し、ススキの穂のような姿になり、雌小穂は分枝しない太い軸に一面につき、包葉に包まれて顔を出さず、絹糸と呼ばれる長い雌蕊だけが束になって包葉の先から顔を出します。

トウモロコシは、コーン(corn)とも言われます。英語圏ではこの語は本来穀物全般を指したそうですが、現在の北米やオーストラリアなどの多くの国では、特に断らなければトウモロコシを指すそうです。ただし、イギリスではトウモロコシをメイズ(maize)と呼び、穀物全般を指してコーン(corn)と呼ぶのが普通だそうです。

トウモロコシは他のイネ科穀物と違い、祖先にあたる野生のトウモロコシが見つかっていないため、原産地と起源が明確にわかっていないそうです。1492年、コロンブスがアメリカ大陸を発見した際、現地のカリブ人が栽培していたトウモロコシを持ち帰ったことでヨーロッパに伝わったそうです。日本への渡来は、いくつかの説があるそうですが、591年頃(天正年間)にポルトガル人によって熱帯型の硬粒種(フリント種)が長崎にもたらされたとされているそうです。

日本語で標準的に用いられている呼称の「トウモロコシ」という名称は、トウは中国の国家唐に、モロコシは、唐土(もろこし)から伝来した植物の「モロコシ」に由来するそうです。関西などで呼ばれている「なんば」は南蛮黍(なんばんきび)の略称で、高麗(こうらい)または高麗黍と呼ぶ地域もありますが、これらはいずれも外来植物であることを言い表しているそうです。

栽培の大敵はアワノメイガの幼虫です。雄穂から雌穂へ幼虫が移動するのを防ぐため、雄穂の出始めた時と、その後7日間隔で殺虫剤を2〜3回散布します。薬剤を使わない場合、雄穂が出た後に幼虫が茎の上部に入った場合は雄穂を切り取ります。また、雌穂に近い場所に入った場合は、穴の上3cmくらいをカッターナイフで縦に切り裂いて幼虫を取り出します。アワノメイガ対策で雄穂を切り取っても、他の株の花粉が雌穂につくので、受粉はできるそうです。

トウモロコシは土壌に残った余分な養分を吸収して浄化し、後作の作物の生育を助けるため、「クリーニングクロップ」として知られています。こうしたトウモロコシの役割は、野菜の輪作体系に組み込まれることで活用されているそうです。